



近年増加しているイネカメムシの発生状況と調査法

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構
中日本農業研究センター

いし
石

しま
島

ちから
力

はじめに

イネカメムシ *Lagynotomus elongatus* (Dallas) は、古くから茨城県において斑点米カメムシ類の主要種であった(高井ら, 1975)が, 1970年代後半以降は水田での生息はほとんど確認されていなかった(大田ら, 2020)。しかしながら, 2010年以降, 発生地点率およびすくい取り虫数が増加傾向にあり, 特に南部地域での発生頻度が高くなっており(大田ら, 2020), 発生量の増加が認められている。2000年以降に茨城, 三重, 滋賀, 京都, 山口で発生が増加傾向にあると報告され(樋口, 2019), 近年では千葉, 静岡, 愛知, 岐阜, 広島など他府県でも本種の発生および被害が報告されるようになってきた。本種は籾の基部を加害することにより斑点米を生じさせる(竹内ら, 2004)だけでなく, 出穂期~乳熟期の吸汁加害によって不稔を引き起こし(稲生・高井, 1975), 大きな減収要因となっている。最近では, 茨城県でも不稔の被害の報告が多く, 早生や晩生の品種で目立つ。これは, 早生品種では, 出穂期が越冬世代成虫の水田への侵入時期(7月中~下旬)と重なるため, 晩生品種は出穂

期が第1世代成虫の羽化時期(8月下旬)と重なるため, と思われる。昨年, 筆者らが調査を行っている茨城県南部の現地圃場でも, 晩生品種に不稔被害が発生した(図-1)。不稔の原因には, 本種を含めたカメムシ類の加害以外にも, 開花期の高温や病害等様々な要因が考えられる。そこで, 本種が不稔の原因になっているのかを確かめるため, 不稔となった穂をサンプリングし, 酸性フクシンを用いた染色により被害籾の観察を行った。その結果, 調査した2圃場ともに調査した籾の70%以上に本種の加害痕である口針鞘の跡が見られ(図-2), この不稔被害は本種によるものであることが示唆された。本種の発生が見られる地域では, 不稔により減収が引き起こされるリスクが高いため, 特に成虫に対する防除が必要となる。

そこで, 本稿では本種を効率的に防除するための発生状況の調査手法およびそれらに基づいて推測される本種の水田内における発生生態の概要について紹介する。

I 調査法

イネカメムシの調査は, 他のカメムシ類と同様にすく



図-1 不稔被害が発生した現地圃場(2020年10月)

※図中の赤枠内は穂の様子。調査場所: 茨城県龍ヶ崎市, 品種「あさひの夢」。

Occurrence and Survey Methods of *Lagynotomus elongatus*, which have been Increasing in Recent Years. By Chikara ISHIJIMA

(キーワード: イネカメムシ, 不稔, 粘着トラップ, すくい取り)